

# 松岳山古墳墳丘範囲確認調査概報

1986年度

1987年3月

柏原市教育委員会

## はしがき

松岳山古墳は国の史跡に指定されている貴重な遺跡です。現在は鬱蒼とした樹木に囲まれ、視界は遮られていますが、古墳が築造された当時は近くに玉手山丘陵、遠くには羽曳野丘陵、河内平野を遠望することができたものと思われます。松岳山古墳の被葬者は、おそらくこうした風景と無関係の人ではなく、古墳時代の初期にあって次第に国々の形成がなされようとする時、河内の地域に大きな影響をもった人であったろうと考えられます。

ところが松岳山古墳については、国宝『船氏王後首墓誌』があまりにも有名で、7世紀代の人物を古墳の被葬者にあてるという大きな誤解が生じていることを始めとして、不明、憶測の部分でその性格が語られることが多いのが現状でしょう。近年では松岳山丘陵上のいくつかの古墳出土遺物、古墳の発掘調査成果を踏まえ、次第に古墳群の性格について論議されるようになってきており、あらためて松岳山古墳の実体の把握が求められてきています。

大阪でも有数の前期古墳である松岳山古墳は、このように古代史研究の上で十分な発掘調査が待たれていますが、一方では国民共有の歴史的遺産として、計画的且つ継続的な調査のもとに古墳の現況を把握し、保護、整備に努めていくことも必要でしょう。本書をその一環とし、今後とも努力を重ねてまいりたいと思います。

昭和62年3月

柏原市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が昭和61年度国庫補助事業（総額 2,600,000円、国庫補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画し、社会教育課文化財担当が実施した、柏原市国分市場一丁目に所在する松岳山古墳の緊急範囲確認調査の概要報告である。
2. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課 桑野一幸が担当し、昭和61年9月24日に着手し、昭和62年3月31日をもって終了した。
3. 遺物整理、本書の作製は桑野があつた。
4. 本書で使用した方位は磁北。真北は $6^{\circ}9'$ 東にあたる。標高はT.Pを用いた。
5. 調査の実施にあたっては、土地所有者の国分神社 数井敏一氏、松岳山古墳保存会 丸山雅夫氏には格別の御配慮を賜りました。記して感謝の意を表します。
6. 調査の実施、本書の作製にあたっては、京都大学名誉教授 小林行雄氏、文化庁主任文化財調査官 河原純之氏、奈良国立埋蔵文化財研究所埋蔵文化財センター長 田中 琢氏、大阪府教育委員会文化財保護課係長 堀江門也氏、四天王寺国際仏教大学名誉教授 藤沢一夫氏、帝塚山考古学研究所所長 堅田 直氏、帝塚山短期大学講師 山本 昭氏、大阪大学助教授 都出比呂志氏の他、多くの方々に御指導、御助言を頂きました。深く感謝いたします。
7. 発掘調査、整理の参加者は下記の通りである。

石田 博	竹下 賢	北野 重	安村俊史	石田成年	伊藤芳国
稻岡利彦	今中太郎	近藤康司	高橋 工	西村 威	松下 修
井上岩次郎	奥野 清	奥野義夫	谷口鉄治	分才春信	道旗甚藏
森口義信	飯村邦子	村口ゆき子	蔽中優香		

8. 本調査においては写真、実測図などの記録を作製するとともに、カラースライド、ビデオテープを作製した。これらは柏原市教育委員会 歴史資料館において保管しており、広く利用されることを願うものである。

## 1. 調査の目的と方法

松岳山古墳は古墳時代前期の前方後円墳として知られており、また最古の墓誌として国宝に指定されている『船氏王後首墓誌』出土地としても著名である。従来の地形観察からは全長120m、後円部径60m、前方部幅35m程の柄鏡形の古墳とされている。ところが、昨年度行なった茶臼塚古墳の調査の際に松岳山古墳前方部端と考えられるテラス、埴輪列が検出され、こうした数値が拡大される可能性があるとともに、前方部の形態を考える上でも様々な問題を投げかけることになった。今回の調査は、こうした規模、形態ともに実体の不明確な松岳山古墳の墳丘範囲を確認し、現在後円部のみにとどまっている史跡指定範囲を、4世紀代の特色ある前方後円墳という基本的な認識の上にたって、前方部にも範囲を拡張するための基礎的な資料作製を目的として行なった。

調査は墳丘南側の後円部斜面、くびれ部、前方部斜面に、当初幅1.5mのトレンチを4ヶ所設定し行なった。後円部に設定した3・4トレンチは、史跡指定範囲外にあり從来墳丘外と想定されていた位置にあたる。1・2トレンチは墳丘主軸にほぼ直交する（図版一）。

## 2. 松岳山古墳の位置

松岳山古墳群は、奈良盆地の水を集め大阪湾に流出する大和川の左岸、大阪平野の最奥部に位置する。大和川に沿った東西約500m、南北約150mの丘陵上に10基前後の前期古墳が営まれている。前方後円墳の松岳山古墳がほぼ中央部、丘陵最高所に位置し、その東西に小規模な円、方墳群が分布する（図-1）。個々の古墳の実体については必ずしも明確になっているとはい

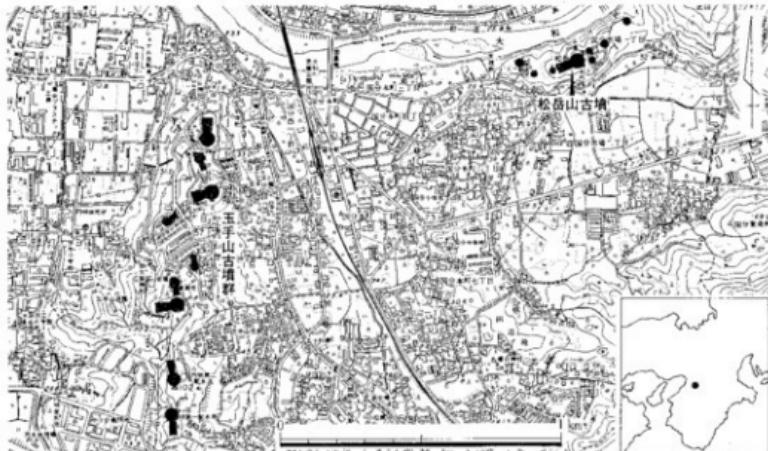


図-1 松岳山古墳位置図

えないが、これまでの知見によれば堅穴式石室、粘土桶などを埋葬施設とし、鉢載、彷彿した鏡類、碧玉製腕飾類、銅製品などが多量に副葬されており、4世紀後半で特徴をもつ古墳群とみることができる。この中で松岳山古墳は墳頂部の平坦面上に置かれた石棺を覆うように石が積まれ、あたかも積石塚状の外観をもっていたと推定される点、石棺が5世紀になって河内平野の首長墓に多用される長持形石棺の初頭的な要素をもつ点、墳頂部に2枚の穿孔された板石が樹立されている点など、極めて特色ある古墳として知られている。

この松岳山古墳群の西方約1Kmの位置には、南河内から大和川に流入する石川に沿った丘陵上に、やはり古墳時代前期から営まれた玉手山古墳群がみられる。稜線上に大小の前方後円墳が南北に継列して築造されている。出土した埴輪等から、玉手山古墳群は松岳山古墳群に先行して造営が開始されたと考えられているが、両者は副葬品、墳丘形態、古墳分布などに大きな相連点をみせ、狭小な地域の中に対峙して営まれている。

### 3. 調査の概要

#### 第2トレンチ（図版一、図-2・3）

くびれ部南斜面に設定したトレンチで長さ23m。遺存状態は良好で、松岳山古墳の墳丘構造、諸施設について多くの知見を得ることができた。以下トレンチの下方から順に概略を記す。

T.P55.7m以下の斜面は安山岩の板石によって覆われている。斜面の傾斜度は約15°。板石の大きさは必ずしも一様ではないが大略長さ25cm、厚さ5cm。平面長方形ないし三角形の長辺を外面に揃え、短辺を封土内に据えて安定させている。こうした手法は墳丘の円礫を用いた葺石にみる小口積みの方法に類似しており、斜面の土砂流出防止、装飾効果をもった葺石とみることができよう。この板石を用いた葺石はくびれ部に沿い、緩く弧を描きながら斜面を巡っている。T.P54m前後に板石が水平に置かれ並列している部分がある。これは擾乱を受け板石

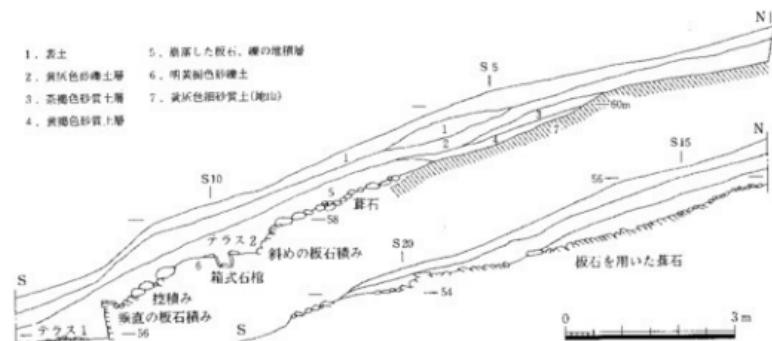


図-2 第2トレンチ土層図

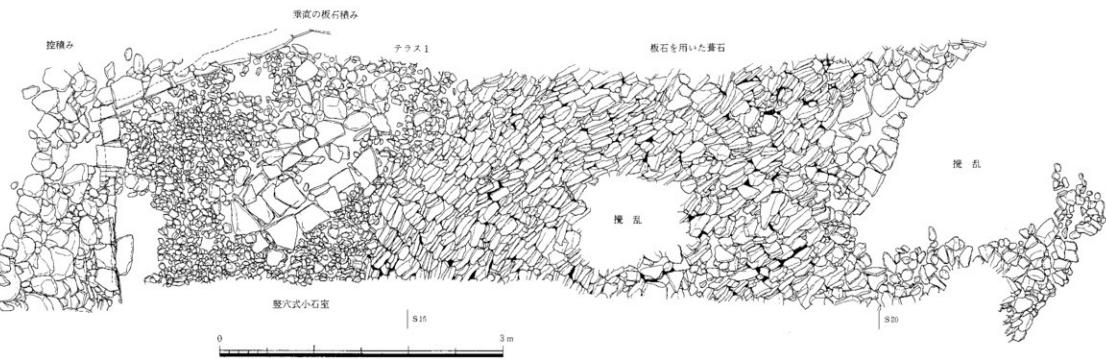
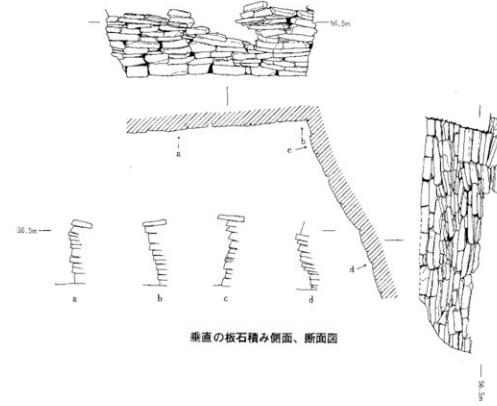
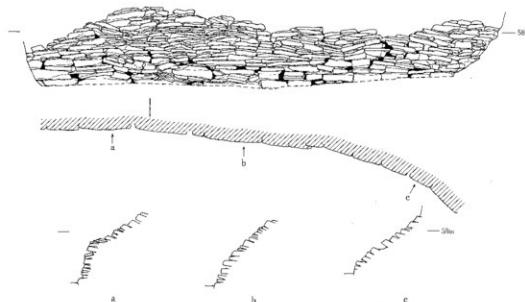
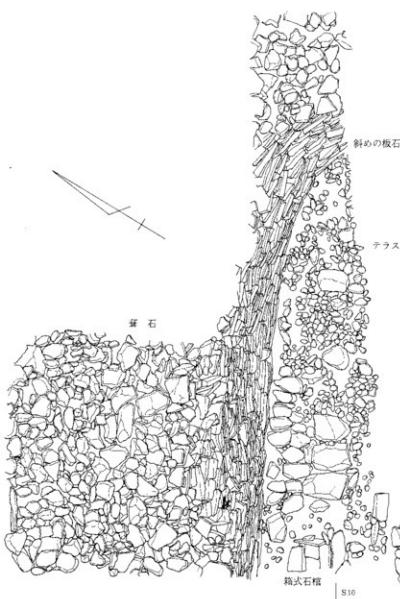


図-3 第2トレンチ実測図

が抜かれた結果であると判断した。トレンチ幅が狭いため、葺石の築成過程を復元することは難しいが、斜面の上下方向に隔線が認められ、一定の区画をもって下方から順に葺き上げていったものと思われる。これらの安山岩板石は東方400m程にある芝山のものであろう。

T.P55.9m前後に小石敷きのテラス1がみられる。小石は明茶褐色砂質土上にのり、明らかに板石を用いた葺石が築成された後に置かれている。テラス幅は一様ではなく、前方部・後円部方向で狭く、前方部・後円部接合点部分で最大になる。後述する前方部垂直板石積みの前面に比較的大きな偏平石が一石置かれ、その周囲には小石はみられない。

テラス1には堅穴式小石室が構築されている（図-4）。遺存状態は悪く、石室床面を構成する板石の一部、壁体基底部の板石が遺存するのみであるが、比較的厚手の基底石上に薄い板石が2~3枚、石室内側に面を揃えて積まれているため、壁体上部の状況は不明であるが堅穴式石室と考えた。石室の主軸はN-59°W、内法は長さ約1.6m?、幅約0.35m、床面は北西部に高く南東部に低くなっている。短側壁は一石で築かれる。石材は安山岩。石室の方向は方位に意図があるのではなく、後円部に沿って築造されたものと思われる。壁体の基底石は小石敷き上に置かれており、石室はテラス1の設置後に築造され、テラス1の平坦面よりも上位に石室空間をもつものであったろう。おそらくテラス1の上に、盛土もしくは積石によって石室を被覆するようなマウンドが築かれていたものと考えられる。

テラス1から板石を垂直に積み上げた基壇状の施設が設けられている。現存する最大高は約0.8m。前方部側の基底高は中央部でT.P55.94m、後円部側はトレンチ壁際でT.P55.83m。後

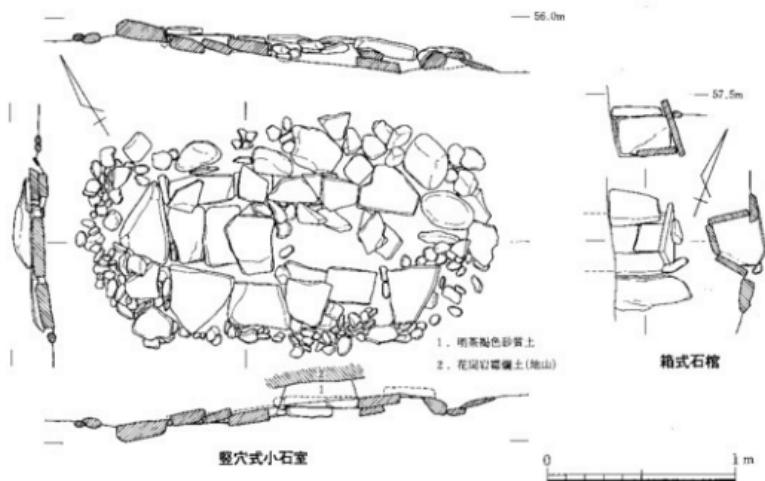


図-4 堅穴式小石室、箱式石棺実測図

円部側で次第に低くなっている。基底石は10cm前後の厚みがあり丁寧に整形されている。上部は長方形ないし三角形状の薄い板石を、長側辺を外面に揃えるように積み上げている。石材は安山岩。積み上げの工程を示す隔線は明瞭ではないが、前方部・後円部接合点の状況は、前方部石積みの外側に後円部石積みが貼り付くように築造されている。ただし、こうした状況からただちに前方部築成の先行性が述べられるものではない。また、後円部側ではこの接合点近くで縱方向に石列が揃う部分があり、前方部・後円部接合点付近では石材の大きさに注意が払われたようである。

垂直の板石積みと封土との間には塊石、板石などが充填され、石積みを安定させるための控積みの役割を果たしている。石材は花崗岩、安山岩、チャートなど多様で、大きいものは長さ50cmを測るものも存在する。こうした状況は、堅穴式石室の側壁と墓塙内の控積みの関係に類似しており、石材の積み上げには同じような工法がとられたのであろう。この塊石を用いた控積みはテラス2を形成している明黄褐色砂礫上（6層）の傾斜面上で行なわれているが、その遺存状況から推定すると、テラス1から立ち上がる垂直の板石積みはテラス2の高さまで積まれ、高さは1.5m程であったと考えられる。

T.P57.3m前後に小石敷きの平坦なテラス2がある。現存する平坦面の幅は約1.1m。垂直の板石積みをテラス2の前面とすると幅は約2.7mになる。内側（北半）は封土上、外側（南半）は垂直の板石積みの控積み塊石上に平坦面が形成されていたものと思われる。後述する斜めの板石積み基底石列に面を揃えるように、平坦面をもつ塊石が並べられている。

テラス2にはトレンチ西壁際に組合せ式箱式石棺がみられる（図-4）。大半は未掘部分に存在し、蓋石の状況も不明であるが、幅0.3m、深さ0.2m。厚さ3cm程の安山岩板石を用い、短側辺は一石、長側辺、底石には数枚の板石が並ぶものであろう。主軸はN-70°-Eをとり、前方部の側辺に沿って築かれたものである。

テラス2からは板石が斜めに積み上げられた石壇状の施設が存在する。基底高はT.P57.44m、高さは最大0.8m、傾斜度は50°前後。石材は安山岩。基底石には厚さ10cm程の板石が利用され、上部は薄い板石が用いられている。石材の形状、利用法はテラス2前面の垂直の石積みと類似する。前方部、後円部を巡るものであるが、両者は緩く弧を描いて連接する。

斜めの板石積みの上からT.P58.8m付近まで、亜円礫、亜角礫を用いた葺石が遺存する。傾斜度は約22°。部分的に最大長40cmを測る塊石も利用され、石材の種類も多様である。

T.P58.8mからトレント上端（T.P60.7m）の間では、葺石等は流出しており、2次堆積層の下に花崗岩の荒礫化した地山面が存在する。T.P60.2m付近に傾斜変換点があり、上部は約10°、下部は約20°の傾斜をもつ。葺石、石積み、テラス等の諸施設は、この地山面上に砂礫土を盛土した後に築かれている。墳丘面は多量の板石、礫によって厚く覆われていたが、これらは墳丘からの崩落石材である。特にテラス1上では板石が多くみられたが、これは垂直の板石

積みが、本来は1.5m程の高さをもっていたと推定した一つの証左にはなろう。

第2トレンチからはコンテナ5箱程の埴輪片が出土した。いずれも小片で、崩落した石材の中から出土しており、樹立された状態の埴輪は存在しない。また埴輪を樹立したと考えられるピットも検出されなかった。テラス1上の崩落石材中からは土師器・壺形土器が出土した。

以下各トレンチの概要は第2トレンチの成果に基づいて記述する。

#### 第1トレンチ（図版一、十一、図-5）

前方部南斜面に設定したトレンチで長さ10m、第2トレンチから約15m離れている。遺存状態は悪く、板石を用いた葺石の一部、垂直の板石積み、斜めの板石積みの基底部がわずかに遺存していた。垂直の板石積み基底高はT.P55.5m、斜めの板石積み基底高はT.P56.91mであり、テラス2前面の高さは1.4m程になろう。テラス2は全く失なわれているが幅3.4m程に復元で

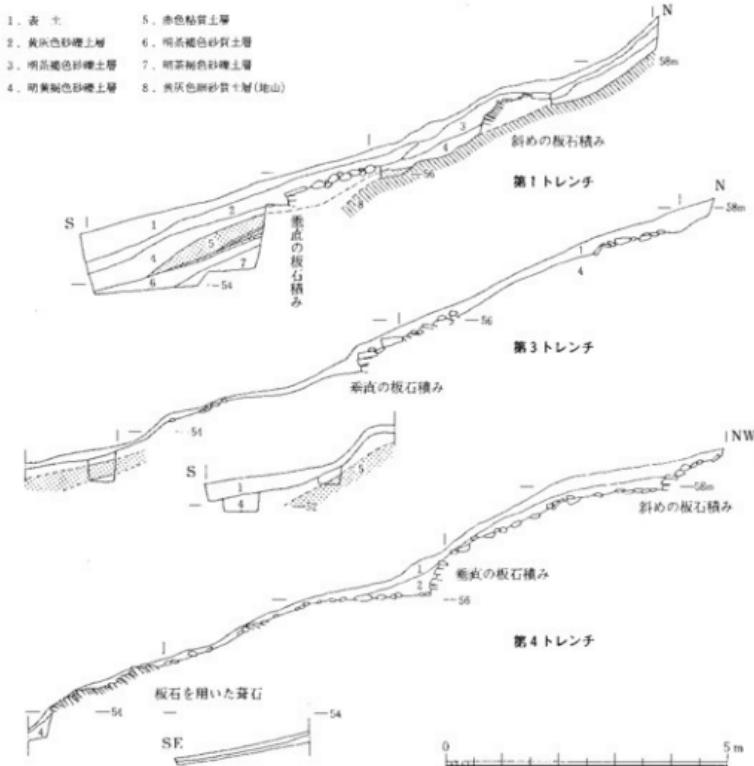


図-5 第1、3、4トレンチ土層図

きる。テラス1はほとんど小石がみられないが、土層の堆積状況から幅0.4m程とみることができよう。

地山は花崗岩の腐爛化した砂質土で $20^{\circ}$ ～ $30^{\circ}$ の傾斜をもっている。石積みの部分で平坦なことはなく、逆に垂直の石積み部分で急激に傾斜度を増している。葺石、石積み等の諸施設は地山上に砂礫土を盛土した後に築かれている。テラス1以下の斜面を覆う板石を用いた葺石はほとんど遺存していないが、4層の明黄褐色砂礫土上に葺かれたものである。このテラス1以下の盛土量は特に多く厚さ1m以上になると思われる。砂礫土以下にも粘質土、砂質土などがみられ、特にレンズ状に盛上された赤色粘質土は多量に金雲母を含み、かつて小林行雄氏の報告された墳頂部平坦面を形成する「赤土の層」と同じ可能性が強い（大阪府教委 1957）。遺物は小量の埴輪片が2次堆積土中から出土した。

#### 第3トレント（図版一、十二、十三、図-5）

後円部南斜面に設定したトレントで、墳丘主軸にはば直交、石棺主軸の延長上にある。緩く弧を描いて巡る石積みを検出したため東側に拡張した。長さ15.5m。遺存状態は極めて悪く、2次堆積もほとんどないため、薄い表土の下にすぐ石積みの一部が検出された。垂直の板石積みはトレント中央部で厚い基底石上に3～4段、東側では基底石が遺存していたに過ぎない。基底高は中央部でT.P55.06m、東端でT.P55.34mと若干高くなっている。第2トレントと本トレントの垂直の板石積み基底高には約0.9mの違いがあるが、第2トレントでは後円部側で次第に下降している状況があり、本トレントもその延長上にあるものと思われる。また本トレントの東端では逆に基底高の高さが増しており、垂直の板石積みは、くびれ部から後円部において本トレント中央部付近でその高さが最も低かったのであろう。この板石積みの外側には、石積みから30cm程離れてその円弧に沿うように石列がみられる。やはり安山岩の板石を用いたもので、上面はほぼ垂直の板石積み基底石の高さに揃えられている。この石列は墳丘盛土の砂礫土上に置かれているが、トレント東部から中央部にかけて砂礫土は西下しており、従って石列上面の高さを一定に保つために、低い部分では板石が数枚積み上げられている。このように垂直の板石積みの外側の状況は、その他のトレントと違いをみせているが、はたしてテラス1、板石を用いた葺石などの施設が存在したかどうかは、現在の遺存状況からは不明とせざるをえない。またテラス2、斜めの板石積みについても同様である。

墳丘の形成については、第1、2トレント同様地山の上に砂礫土を盛土した後、葺石、石積み等を行ない、垂直の板石積み以下の斜面部では、盛土中に赤色粘質土がみられることから第1トレントと同様な工法がとられたものと思われる。遺物は小量の埴輪片が出土した。

#### 第4トレント（図版一、十三、十四、図-5）

後円部南東斜面に設定したトレントで、墳丘主軸に対しあは $55^{\circ}$ で交錯する。長さ14m。2次堆積は少なく、薄い表土下に葺石、石積み等が検出された。板石を用いた葺石、テラス1、

垂直の板石積み、テラス2、斜めの板石積みが検出されたが、遺存状況はあまり良くない。板石を用いた葺石はT.P55.9m以下の斜面を覆い、斜面の傾斜度は約20°。垂直の板石積み基底高はT.P56.12m、現存高は約0.6mであるが多くの板石が抜かれている。斜めの板石積み基底高はT.P57.92m、現存高約0.3m。両者はほぼ1.8mの比高差があり、4ヶ所のトレンチ中最大である。またテラス1、2は攪乱を受け当時の状況をとどめていないが、それぞれ幅2.25m、4.1mと復元される。小量の埴輪片が出土した。

#### 4. 出土遺物

土器、埴輪片がコンテナ6箱程出土。大半は2トレンチのもので、原位置を保つものはない。

1、2は土師器・壺形土器。1は2トレンチ垂直の板石積みの前面から出土。1/3残存、器高13cm、口径10.5cm、体部径12.5cm、複合口縁で端部は細く外反する。口縁部～肩部はナデ、体部上半はケズリ、下半はハケ目調整。2も同じ場所から出土。口縁1/3残存、口径10cm。口縁端部は厚く平坦面をもつ。ナデ調整。いずれも5世紀代のものであろう。

3、4は2トレンチ出土の朝顔形埴輪。器面の剥落が著しく、4の内面はヨコ方向のハケ目調整。円筒埴輪片は小破片のため橢円形、普通円筒を区別することは難しい。ここでは大形のもの（6～9）と小形のもの（10、11）があり、凸帯の形状には稜線が強調されるもの、長方形で高いもの、正方形、台形のものがあることを報告しておく。器面はタテ方向のハケ目、もしくはナデ調整。小形のものには器面に文様をもつものがある（5）。

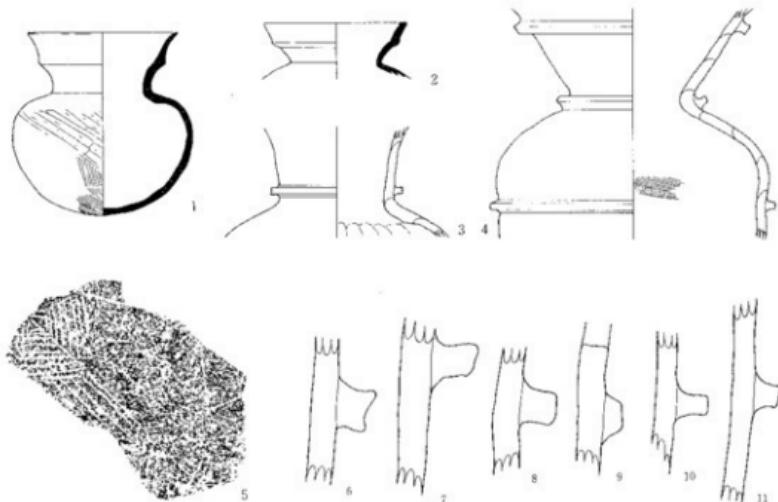


図-6 出土遺物（縮尺1・2：1/4、3・4：1/8、5：1/2、6～11：2/5）

## 5. 墳丘範囲と外周施設の推定

各トレンチの調査成果をもとに、墳丘諸施設を破線で結んだものが図版一である。くびれ部から後円部にかけては、正円ではなくやや墳丘主軸方向にのびており、これは等高線上でも確認することができる。テラス面は一定の高さではなく、地形によって高低差をもつ。前方部は約3°の傾斜で西下している。これらの点は、松岳山古墳の築造が狭い丘陵尾根上という地形に大きく制約されていたことを示している。

墳丘範囲については、今回の調査では確証を得ることはできなかった。ここではいくつかの観察点から推定しておきたい。斜めの板石積みは、積み石塚等の墳丘端部にみる塊石を用いた石垣状積石に類似し、そのラインは前方部で墳丘主軸に平行、全体として柄鏡状の形態を示している。テラス2の幅は一定せず、垂直の板石積みが示す前方部のラインは、先端部に向かって次第に開いている。板石を用いた葺石に覆われた斜面の傾斜度は約15°～20°で、通常の墳丘斜面と比較し緩やかである。これらの点から斜めの板石積みの示すラインが墳丘範囲を示す可能性があることを指摘しておきたい。そしてその外側を板石を用いた葺石で示される外周施設が巡り、全体として莊厳な墓域を形成していたのであろう。

ところで茶臼塚古墳調査時に松岳山古墳前方部端とされたテラス面は、約0.4mの垂直の石積み上にT.P48.7m前後の高さをもって築かれている。松岳山古墳前方部の西下する傾斜度から判断した場合、このテラスを今回検出したテラス1、2、あるいは板石積みと結び付けることはできない。むしろ墳丘の外周施設として推定した板石を用いて葺かれた斜面の周縁部として考える方が、地形的にみた場合より蓋然性が高いだろう。

以上のような点を踏まえ松岳山古墳の規模を推定すると、外周施設全長約155m、墳丘長約30m?、後円部径約72m、高さ約16m、前方部幅約32mになる。今回の調査では墳丘北側斜面、前方部前面、墳丘段築の状況などを明確にすることはできず、これらが古墳の実体を把握する上で不可欠なだけに大きな反省点を残すことになった。しかし近畿地方の4世紀後半代の前方後円墳として、多量の板石材を用いた墳丘、テラスの築成法、外周施設を示し、墳丘裾を巡る小形埋葬施設等を検出できたことは、松岳山古墳の実体、性格に迫る上で大きな成果を上げることができたものとも考えたい。

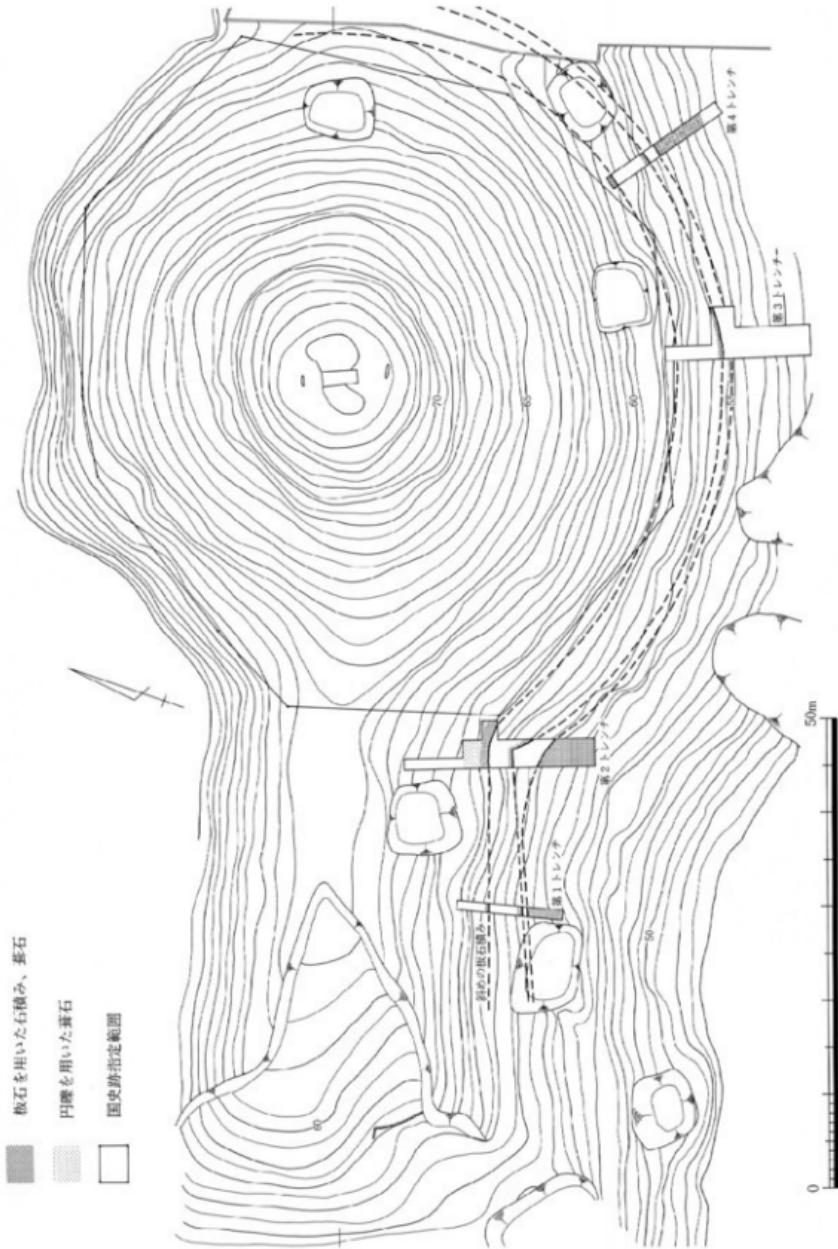
調査後は墳丘面を土嚢で覆った上に土砂を埋め戻し、保存・景観維持に努めている。

	1トレンチ	2トレンチ	3トレンチ	4トレンチ
斜めの板石積み基底高(A)	56.91m	57.44m	×	57.92m
垂直の板石積み基底高(B)	55.50	55.94	55.06m	56.12
(A) - (B)	1.41	1.50	×	1.80
テラス1幅	0.40	2.60以上	×	2.25
テラス2幅	3.40	2.70	×	4.10

諸施設法量表

# 図 版

図版一 レンチ設定図



図版二 松岳山古墳遠景



松岳山古墳と大和川（西方よりみる）



松岳山古墳（南方よりみる）

図版三 第2トレンチ



全景



くびれ部斜めの板石積み、テラス2、控積み、垂直の板石積み



くびれ部垂直の板石積み、テラス1、竪穴式小石室



板石を用いた葺石 くびれ部の状況



板石を用いた葺石



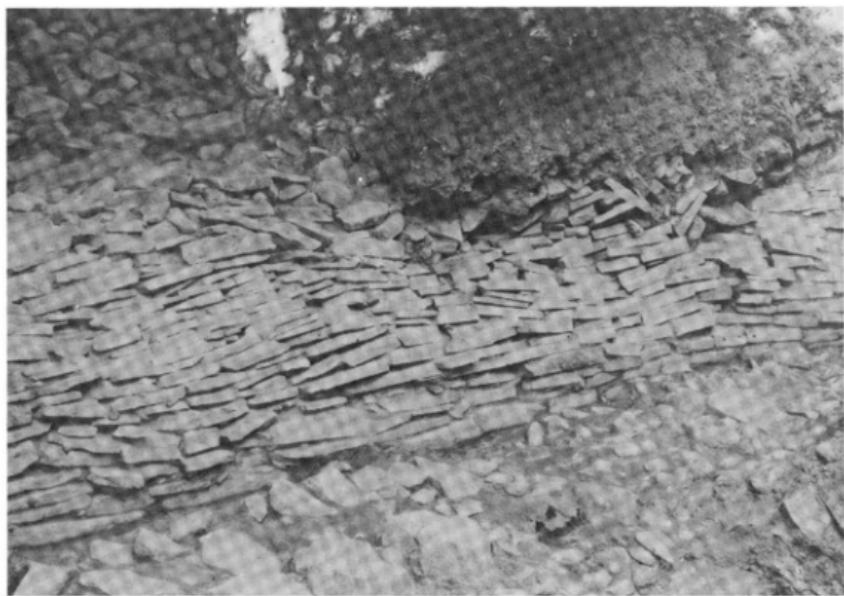
垂直の板石積み前方部



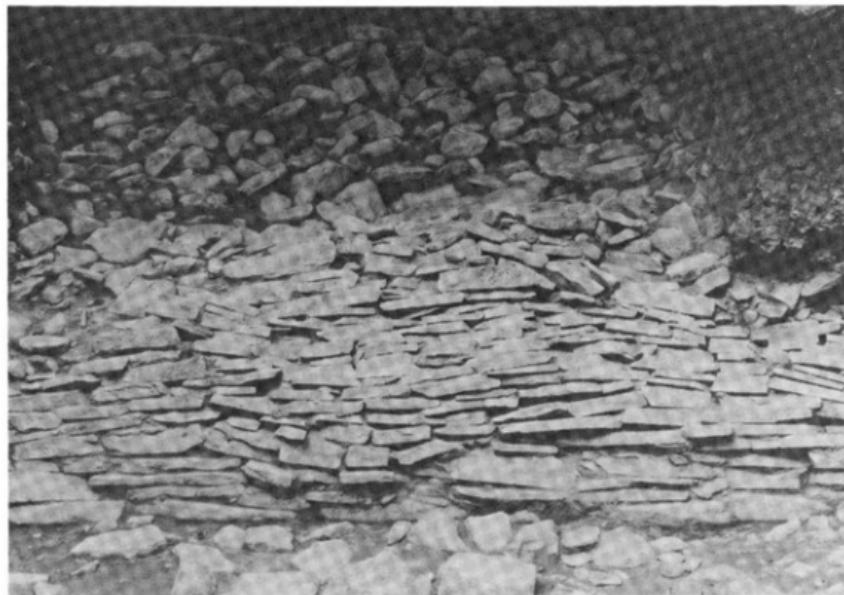
同 接合部



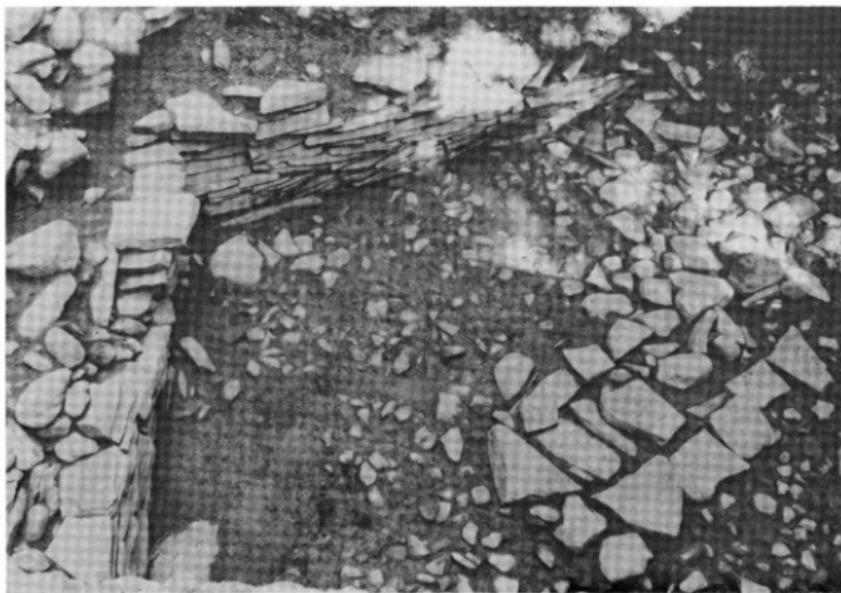
同 後円部



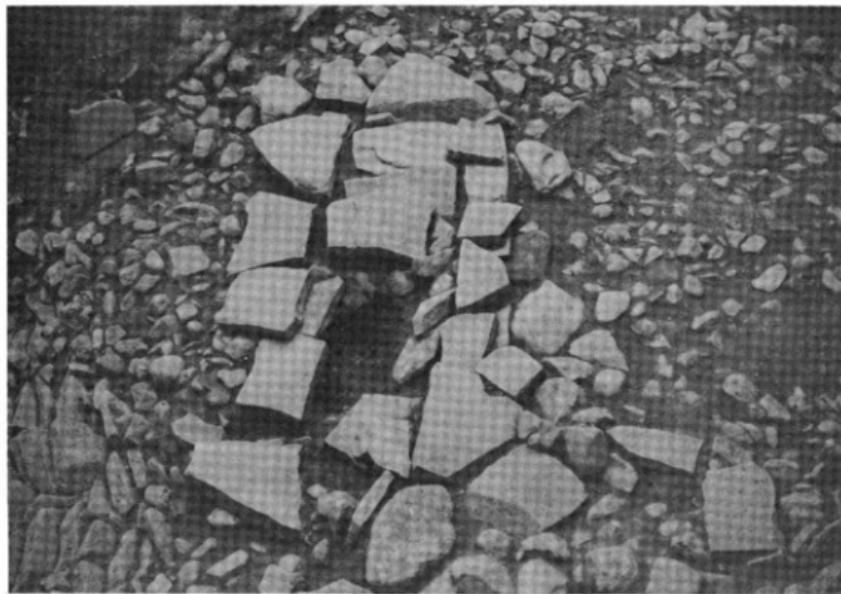
斜めの板石積み 前方部からくびれ部



斜めの板石積み 前方部



垂直の板石積みと竪穴式小石室



竪穴式小石室（南東よりみる）



竪穴式小石室（南よりみる）



竪穴式小石室側壁基底石と盛土、地山面



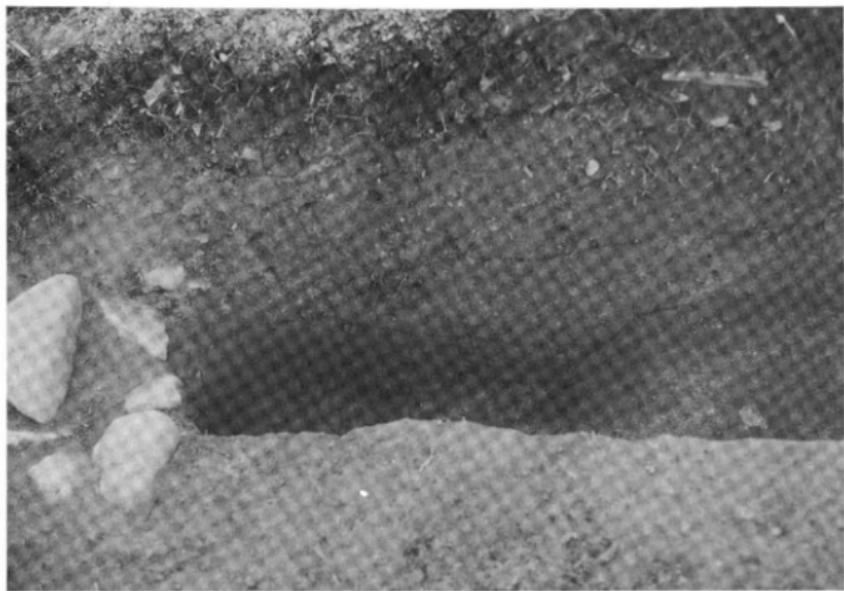
箱式石棺（東よりみる）



箱式石棺（北よりみる）



斜めの板石積み



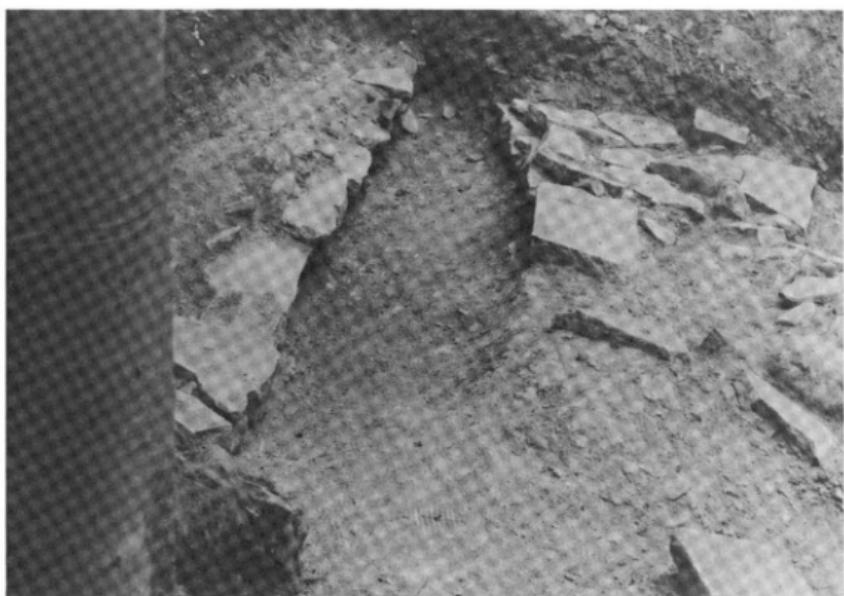
斜めの板石積み下部の地山面傾斜状況



トレンチ中央部 垂直の板石積み



トレンチ東部 垂直の板石積み基底石と外側の石列



第3トレンチ 垂直の板石積み基底石と外側の石列（西よりみる）



第4トレンチ 板石を用いた葺石



斜めの板石積み



垂直の板石積み



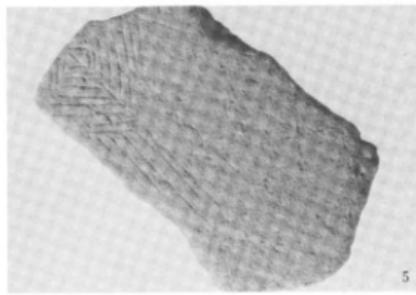
第2トレンチ調査後の墳丘面の保護



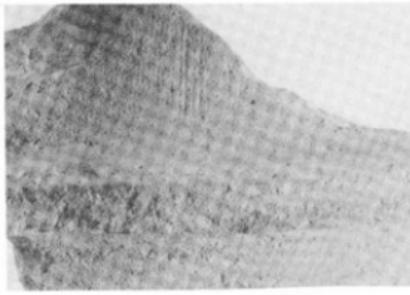
1



4



5



松岳山古墳墳丘範囲確認調査概報

1986年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内716

発行年月日 昭和62年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

